

# ART KISS LETTER

TITLE

PAPER

かみと現代美術

A Quest into the World "with" PAPER

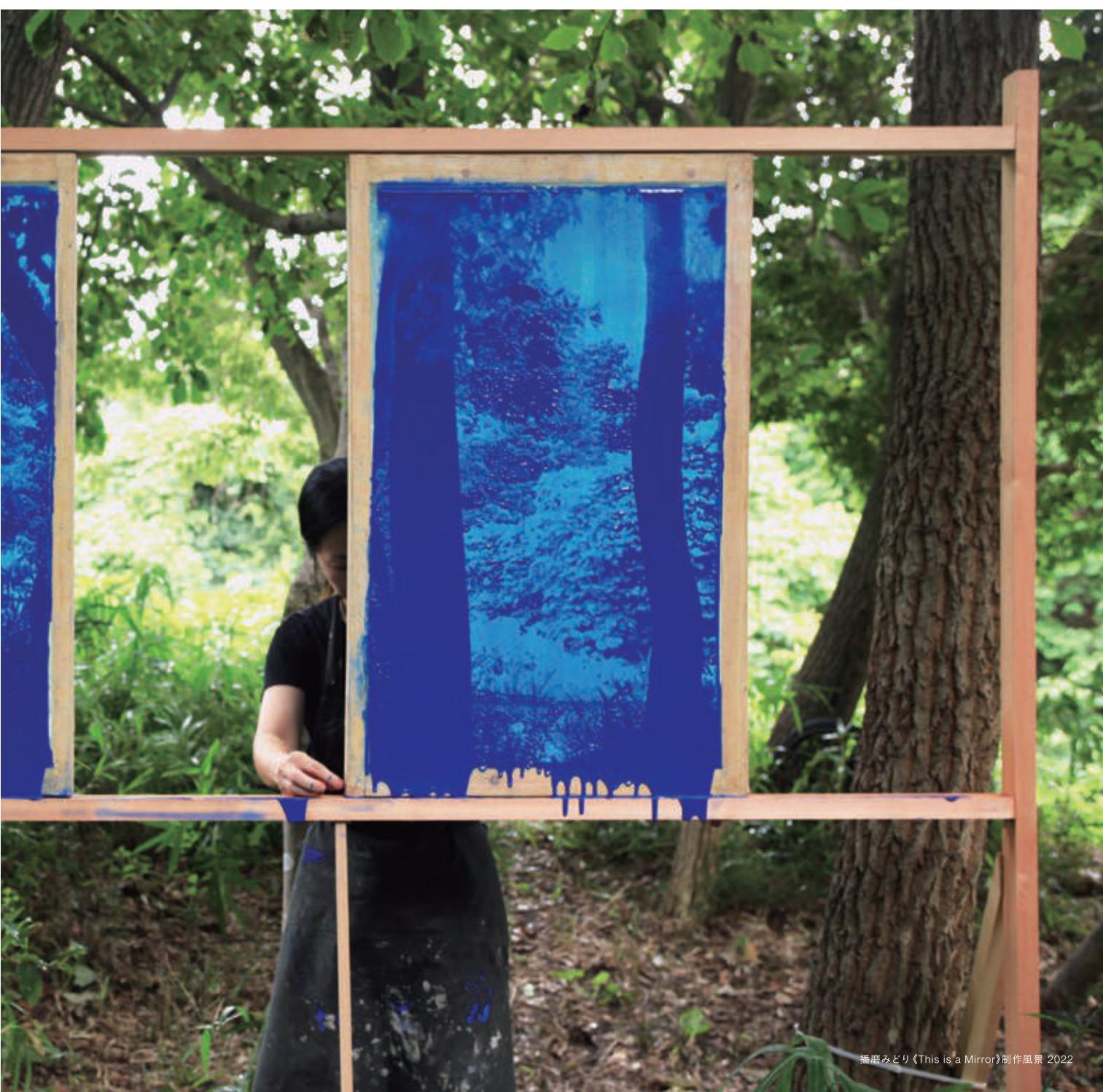
DATE

2022

10.1<sup>土</sup>—12.18<sup>月</sup>

開館時間 10:00—20:00 (展覧会入場は19:30まで)

休館日 火曜日



播磨みどり《This is a Mirror》制作風景 2022

# PAPER かみと現代美術

鷲田めるろ

展覧会をつくるとき、ほとんど読めないほどの小さな字で記されるにも関わらず、キュレーターがかなり神経を使うのがキャプションの素材表記だ。

立体作品の場合、使われている材質を書く。どこまで詳しく書くかは悩ましい。「金属」か「ブロンズ」か、「木」か「クスノキ」か、あるいは「流木」ということもある。

平面作品の場合は慣習的に技法と素材が混在する。例えば「油絵具、麻、木」ではなく「カンヴァスに油彩」となる。あるいは「油彩／カンヴァス」という記述方法もある。「/」より後は「基底材」を示す。一般的に額は交換可能であり、その意味で作品の外部である。それに対して、描かれたイメージと基底材は接着して分離できない。だが、描かれたイメージの部分が作者の表現だとすれば、基底材はその外部ということになる。「/」という区切りはこうした微妙な外部感を表現したものだろう。

熊本市現代美術館で開催された「PAPER：かみと現代美術」展には、9名の作家が参加しているが、紙との関わり方はさまざまだ。

例えば、展覧会の最初に展示されている半谷学は、縦帳に使われていた麻ロープや畳の製造過程で出る端材のイグサなど織化できる廃材からオリジナルの「紙」をつくり、それを花の形に造形している(fig.1)。紙自体が作家の制作物であるとともに、立体作品の素材として紙を使っている。

続く半澤友美も紙自体が作品だ。だが「漉く」ではなく「垂らす」(fig.2)。何層にも重ねられた金網に水に溶いたパルプを垂らし、立体的な「紙」をつくっている。

ウチダリナの作品は、骸骨やセピア色の写真に蛾が止っている

様子が、本物と見紛うほどの精巧さでつくられている(fig.3)。

羽は茶色い線で細かい模様が描かれているように見えるが、ハンダゴテを用いて紙を焦がすことによって図柄を描き出したものだという。そう聞いてよく見ると、肖像写真の顔の部分はタバコの火を押し付けられたかのように丸く焦げて顔を隠している。

「インク／紙」のように顔料と基底材に切り分けることはできず、

紙が熱によって変化している。図と地は素材の面では同じ紙だ。他方、後半に登場する小野田賢三は、通常はがきという既成の印刷物を二つに折り曲げて立体物にしている(fig.4)。

通常はがきを印刷したのは日本郵便であって作家ではないのだが、日本郵便を作者とする印刷物として素材表記するなら「オフセット印刷／紙」となるだろう。ところが、それをただ二つに折り曲げるという誰にでもできる僅かな行為を小野田と出会った不特定多数の人たちが加えたことによって、たちまち素材は「日本製官製ハガキ」に変化する。

紙は、イメージの背後に隠れてしまう基底材にもなりうるし、立体の素材にもなりうる。小野田の作品は、この面白さを突いていた。

渡辺英司は、図鑑から植物やキノコの図柄を切り抜き、それぞれが地面から生えているかのように垂直に床に広げてインスタレーションを制作した(fig.5)。壁沿いには切り抜かれた図鑑が置かれ、ネガとポジの関係を示している。小野田の場合は「折る」という行為だったが、渡辺は「切り抜く」という行為によつて、平面的な印刷物の基底材としての紙を、立体作品の素材へと変化させている。本のページに印刷された千円札はニセ札ではないが、切り抜かれた瞬間にニセ札とみなされるという、赤

瀬川原平の千円札裁判をめぐるエピソードを思い出した。

そうしたなか、異色だったのは播磨みどりである。紙をテーマにしたグループ展であるにも関わらず、紙が一切登場しない映像作品を出品していたからだ (fig.9)。

播磨の作品は展覧会の中ほどにある。展示室の壁に、二つの映像が横並びに大きく投影されている。映像では、林の木々の間に二つのシルクスクリーンの枠が垂直に窓のように立てられている。それに向かって、おそらく作家自身と思われる女性が青いインクを擦りつけている。

映像の右の画面はシルクスクリーンの枠を正面から捉えており、左の画面はその反対側から、すなわち撮る人の背後から撮っている。右の画面には、左の画面の映像をフィルムカメラで撮影している人物の姿も写り込んでいる。

工芸的とも言える作品が多い前半の展示を見ていたとき、遠くから鳥が鳴るような声が聞こえてくると思っていたが、これは、播磨の映像の中で、シルクスクリーンのスキージを版に擦り付けている音であった。

シルクスクリーンは、スクリーンの細かな穴を通ったインクを紙などに定着させる版画技法である。紙やTシャツなどに印刷する場合には、水平にした紙などの上に枠を置いて摺る。だが、播磨の作品の場合は紙がなく、スクリーンを青く染めたインクは下に垂れてゆく。

これは宙に向かって摺っているとも言えるが、距離を隔てて撮影するカメラのフィルムに摺っているとも言えるし、さらには、その映像が投影されている壁面に摺っているとも言える。いや、もっと想像を広げれば、播磨の図版が印刷されたこのニュース

レターの紙に刷っているとすら言えようか。

シルクスクリーンは、例えば手で彫る木版画とは異なり、写真製版される。そのため、カメラを使った映像という技法とも連続性がある。映像から正確には確認できないが、播磨作品でスクリーンに製版されているのは、カメラの視点から見える林を撮影した写真のようだ。播磨はさらに「フィルム」という今ではあまり使われなくなった物質的な素材もあえて介在させているから、なおさら重ね合わせられたレイヤー同士の連續感は高まる。

印刷物において、イメージの背景に退く紙、すなわち「/」の後に切り分けて置かれてしまう紙を消し去り、見えない存在であることを突き詰めることによって、逆に播磨は紙の存在を浮き上がらせている。

表と裏の両側から写され、左右反転する播磨の作品が、展覧会の前半と後半の折り返し地点に、基底材としての紙の不在を徹底した作品として展示されていたことで、「/」の前後を行き来する紙という素材の特殊性をより深く考えることができた。

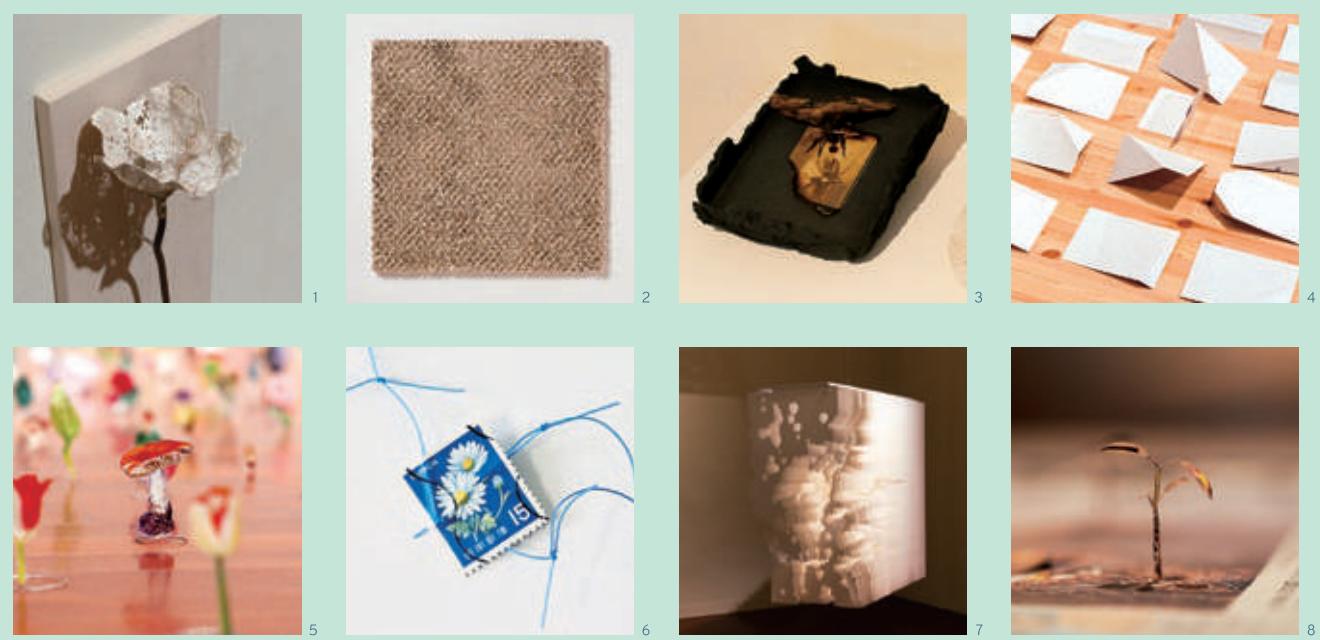
このレビューは下記の原稿に加筆されました。

「素材として、基底材として『PAPER：かみと現代美術』展」(プレイヤード・美術)『すばる』第44巻第12号(2022年12月)、pp.310-311。

鷲田めるろ(わしだ・めるろ)

十和田市現代美術館館長

1973年京都市生まれ。東京大学にて西洋美術史を学ぶ。金沢21世紀美術館を経て2020年より現職。第57回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館キュレーター(2017)、あいちトリエンナーレ2019キュレーター。著書に『キュレーターズノート二〇〇七一二〇二〇』(美学出版)。『すばる』に連載。



1. 半谷学《さしがさばな》2022 2. 半澤友美《Traces》2022 3. ウチダリナ《Queen》2019 4. 小野田賢三 ref. 照屋勇賀《Pilgrim》2011-2022 5. 渡辺英司《名称の庭》1992/2022 6. 太田三郎《Bird Net—世界はつながっている「献花」》2022 7. 安部典子《水源—Water source》2022 8. 照屋勇賀《Minding My Own Business》2011 9. 播磨みどり《This is a Mirror》2022

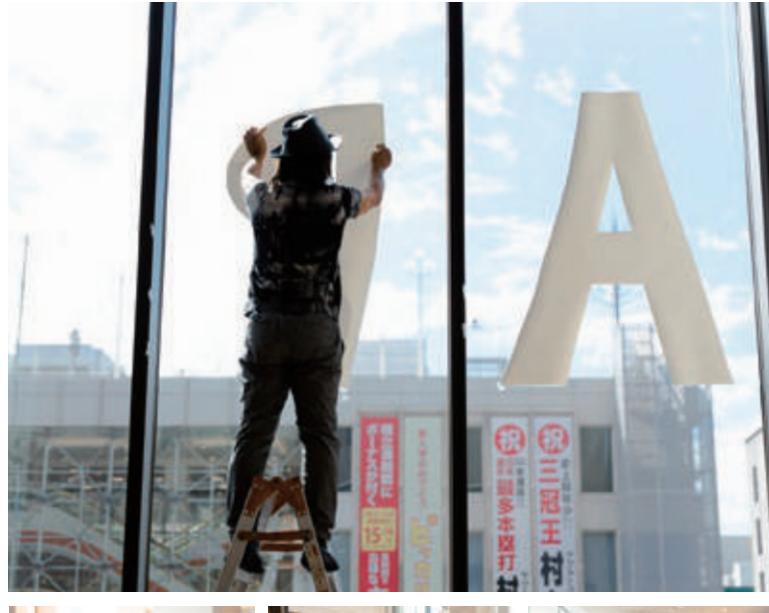


Photo: Shintaro Yamanaka (Qsym!) No.1, 3, 4, 5, 7, 8, 9 Mikiro Tamai: No.2

## アート ラボ マーケット 新スペース「ART LAB MARKET」オープン

2022年10月12日に、熊本市現代美術館は開館20周年を迎えました。この節目を機に、館内に新たなコミュニケーションスペース＆ショップ「ART LAB MARKET」がオープン。「ART LAB MARKET」は今後、ワークショップをはじめとする各種制作活動の舞台となるとともに、さまざまな人たちの交流の場とすべく運営していく予定です。また一体となったショップ部分では、地元作家の作品やオリジナルグッズも販売しています。

オープン初日には、本スペースのディレクションをした日比野克彦館長が、スペースの看板の公開制作をおこないました。来館者の皆さんのお目の集まるなか、日比野館長はカッティングシートで「ART LAB MARKET」の文字を手際よく切り抜き、人々が行き交う街なかに向けて掲げていきました。



またこれと同じタイミングで、ホームギャラリーの机とイスも「ART LAB MARKET」と連動する形でリニューアルをおこないました。大型書籍なども読みやすい環境となりましたので、ご来館の際にはぜひ立ち寄ってみてください。

今回のリニューアルにあたっては、クラウドファンディングをとおして数多くの方々からご支援をいただきました。あらためまして、当館をサポートいただいた皆さんに心より感謝申し上げます。

Photo: Shintaro Yamanaka (Qsyum!)

## Event

### 「和紙で型取りしてみよう」@アートラボマーケット



日時：2022年12月2日(金) - 12月18日(日)  
10:30 ~ 17:00 (時間内出入り自由)

「PAPER:かみと現代美術」の関連イベントとして、出品作家のウチダリナさんのワークショップ「和紙で型取りしてみよう」を開催しました。このワークショップではウチダさんが作品に使用している典具帖紙（てんぐじょうし）という和紙を使用。参加者はウチダさんの作り方動画を見ながら和紙を細かくちぎり、重ね合わせ、気に入っているものの型取りをしました。

## 熊本市現代美術館 Contemporary Art Museum, Kumamoto

[来館者の皆さまへのお願い] 新型コロナウィルスの感染拡大を防止し、美術館を安全にご利用いただくため、ご来館の際には手指消毒・咳エチケットのご協力をお願いいたします。また、発熱・咳・くしゃみ等の風邪の症状がある方は、ご来館をお控えください。

ART KISS LETTER Vol.105 (2022年12月)  
編集:佐々木玄太郎、岩崎美千子、市下純子 執筆:鷺田めるる  
発行:熊本市現代美術館 www.camk.jp  
〒860-0845 熊本中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500

